



AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

フレンド会報31号

ビル名が
変わりました

〒102-0074
東京都千代田区九段南2-3-22
アーバンセカンドビル3F
TEL:03-6265-6490
FAX:03-6265-6491



2021年2月1日 発行

AEFAの3層構造理念



村の活動の中心になる子どもたち

「コロナ時代」の支援とコミュニケーション

NHKワールドでAEFAとCSDの活動を集



村の活動の中心になる子どもたち

リーダーとして活動することで、子どもたちが自らの可能性を拓げるラオスの環境プロジェクト

経済発展が進む中で、ラオスの少数民族の村の生活の中にもプラスチック製品が急増しています。人々のごみを埋めるか燃やすか川に流すことで対処しており、ごみの投棄や焼却による環境/健康リスクが懸念されています。

そんな中、学校で“ごみを減らす”活動をするという「きっと、ごみ拾いや掃除をさせられるんだろうな。」と嫌々参加した生徒たち。そこにお揃いのシャツを着た中学生が現れて、竹材やペットボトルのリサイクル方法を実演したり、環境問題を寸劇にして演じてみせたりしたので、みんなびっくりしてしまいました。

この中学生たちは、ラオスのサラワン県で始まった「EES: Environmental Education at School in southern Laos(環境プロジェクト)」のリーダーです。

これまで私たちAEFAがラオスの少数民族の村で目にしてきたのは、大人の前でおとなしくしている子どもたちでした。発言をうながしても緊張して言葉が出ないことが多く、グループ活動を企画したり大勢の前で自分の考えを発表したりする姿を見ることはほとんどありません。

その背景のひとつとして、年長者を敬い大切にするというラオスの文化があります。それ自体は尊いことですが、一方で、子どもの自主性や判断力が育たない、主張ができない、といった問題もあります。

大人が言うことは正しい、黙って大人の言うことに従っていればいい…限られた社会の中で、そんな風に子どもたちが育っていくことに危機感を抱いていたのが、AEFAのパートナーNGOであるACD(Association for Community Development)です。

環境プロジェクトは身近な“ごみの問題”をテーマとして、子どもたちが自分で考え行動する力を育てよう、自分たちの生活の場を守り、健全な環境をつくりだしていけるようにしよう、という思いからスタートしました。2019年、ACDとAEFAの協力のもとに、サラワン県サラワン郡ファイラ中学校とラオガム郡ヴァンプアイ中高校で活動を開始。続けて、2020年にはナボン中高校・ホーコンナイ・ピエンカム・クアセットの各中学校でも開始しました。いずれもAEFAの支援校です。

このプロジェクトの最大の特徴は、「ユース・ボランティア」と呼



写真：左上) 寸劇 左中) 竹でゴミ箱を編む 左下) 村の環境の現状を説明する 右) ユース・ボランティアとACDのノンさん

ばれる子どもたちが活動のリーダーであるという点でしょう。自分の学校の生徒たち、さらには近隣の学校の児童生徒や村の大人たちにも環境意識を啓蒙するという重要な使命を、子どもたちが担うのです。

活動に先立ちユース・ボランティアたちはACDが行うトレーニングに参加します。そこでは、ごみの種類やリサイクルなどについて知識を得るだけでなく、啓蒙活動のプランニング方法やリーダーシップ・スキル、そして、いかに“楽しく”人々を活動に巻き込んでいくかを学びます。また、学校や村の地図を作り、どこにごみ投棄されやすいか、なぜそこに捨てられるのかを考える、というワークショップも行います。

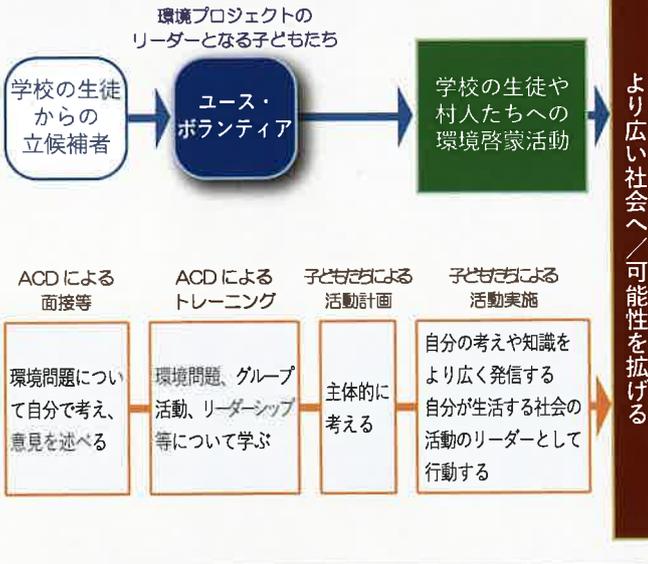
トレーニングを受講したユース・ボランティアたちにより、2019年5月、ファイラ中学校で活動が開始されました。初回は「村の現状と、あるべき姿」についてのプレゼンテーションがメインでしたが、人前で自分の考えを述べたりする経験がほとんどなかった子どもたちにとって、これは大きな一歩でした。その後、活動を続ける中でユース・ボランティアたちは徐々に自主性を高め、活

動内容も充実させています。新しく加わったプログラムのひとつは、ペットボトルをほうきにリサイクルするもの。ペットボトルを細く割いて板に巻き付け、お湯で煮て形状を整えると、まっすぐなひも状になるので、これを束ねてほうきにします。これはユース・ボランティアたち自身の発案によるプログラムです。また、参加生徒たちがより楽しく環境問題について考えられるようにゲームや寸劇、クイズを取り入れるなど、さまざまな工夫を重ねています。

村の人々への啓蒙手段はというと、ラジオです。ユース・ボランティアの子どもたちは、自分たちでラジオ番組を考えて、週に二回放送します。ラオスでは皆でご飯を食べ、歌ったり踊ったり、とんち話や笑い話などをわいわい語るのがなよりの娯楽。ラジオ番組でも、環境に関する話をコメディ仕立てにしたり、音楽リクエストを取り入れたりして、楽しく聞ける工夫をしています。

環境プロジェクトには、ひとつ重要な狙いがありました。それは、「子どもたちが何を言ってもいい、安全な場を提供すること」です。ユース・ボランティア向けのトレーニングや各学校でのイベントには、ACDスタッフや教育スポーツ省の職員、学校の教師、

環境プロジェクト 模式図



写真：左下) 活動開始の前には目を閉じて集中する 右上・右下) ペットボトルでぼうきづくり

村の幹部など、合わせて数十名の大人も参加してサポートします。その中で、あなたたちは大人の前で自由に発言していいんだよ、自分で考えるって素晴らしいことだよ、わたしたち大人はそれを応援するよ、ということ子どもたちに伝えたいと考えているのです。

学校の生徒たちは、この活動をリードするクラスメイトの変化を感じています。「ユース・ボランティアになった友達がすごく変わった。自信をもって話すようになったし、リーダーとしていろいろ教えてくれるようになった。わたしもユース・ボランティアになったかった！」と、ある生徒。

ユース・ボランティアの保護者のひとりであるカーンさんは「うちの子たちはこの活動のことが大好きみたい。いろんなことが学べるのがすごくうれしいと言っています。家で話題にすることもこれまでとは全然違って、家庭やコミュニティについて話をするようになったわ。」と言います。

「うちの息子が放課後や週末に活動するとか言い出して、最初は友達とほっつき歩くための口実だろうと思ったんだよ。」と言うのはデーさん。「先生が活動のことを説明してくれた。そのときは、こんな田舎じゃ難しいんじゃないかと思ったけど、たいしたもんだね！うちの息子がメンバーだなんて、うれしいよ。」

ユース・ボランティアのメンバーは、自らボランティアに立候補し、ACDによる面接等を経て選ばれた子どもたちです。メンバーのひとりであるロッチャナさんは「自分のパワーとエネルギーを環境のために使う機会がいつか来た、これを逃してはならない、と思いました。」と言います。同じくメンバーのソムサイくんは「ごみの問題は、個人的に気にしているだけだった。それが変わった。」と言います。そして、多くのメンバーが「もっといろんなことを知りたい、経験したい」と言います。子どもたちが得たのは、人前で話せるようになったという自信だけではないのです。

環境保護への関心やごみに関する問題意識、何かやらなければという漠然とした思いなどを、自分ひとりの胸の内に抱えていた子どもたち。環境プロジェクトという場を得て、子どもたちは自分の知識や考えを友だち、家族、村人たちへと発信し、学校や村の環境改善のために主体的に行動することを学びました。この経験が子どもたちの前に新しい扉を開きつつあります。社会と関わり、より良いものに変えていく可能性の扉です。

子どもたちひとりひとりが自分らしく、かつ、自立して生きる力を身につけるために、子どもの可能性を信じる。これからもACDとAEFAのチャレンジは続きます。

◆本活動は、トレケート社及びセカンド・オピニオン社のご支援によるものです



写真：左) 村の現状と理想を絵に描いた 右) 子どもDJのラジオ放送

ACDのこと

ラオスのサラワン県で学校建設プロジェクトを進めるためにAEFAが現地パートナーを探していた頃、ACDはまだ設立されておらず、代表のノンさんと会計担当のニヤイさんはVFI: Village Focus Internationalという国際NGOの傘下でサラワン県での活動を担当していました。AEFAがVFIと契約したことで、お二人との共同作業がスタートしました。

当時はAEFAも現地関係者も学校建設の知識・経験がほとんどなく、試行錯誤とトラブルの連続でした。その経験を共にしたことで、お二人との関係が深まったように思います。

その後、「VFIの方針にとらわれず、少数民族にとって本当に必要な現地に根ざした活動をしたい」という思いを強くしたお二人が独立して、政府登録団体として設立したのがACDです。ちょうどAEFAも、プロジェクトの大小・予算の多寡に関わらず意義のあることをやりたいと考えていた時でした。両者の思いが一致し、2013年からACDとAEFAの協力による活動が始まりました。

ラオス政府の認可を得ること自体、大変ハードルが高いことですが、若い女性が政府と交渉するというのも大変珍しいことでした。女性二人で始めたACDは、いまや21名の規模にまで拡大しています。当時も今も、ノンさんとニヤイさんの信念と行動力に感服するばかりです。

ACDは「子どもたちにとって勉強とは“生きるために必要なことを学ぶこと”であり、それは、自分で考え、自分の未来を作れるようになることだ」という理念を掲げて活動しています。今回ご紹介した「環境プロジェクト」もその活動のひとつです。

ラオスには“子どものため”と謳うさまざまなプログラムがありますが、内容は大人向けで、参加者も大人ばかりです。ACDの子どものためのプログラムは、子どもが中心にいます。環境プロジェクトは、子どもたちが知識だけでなく自信を身につけ、地域の中心となって成長していくひとつの道筋をひらきました。

地域と国の将来を見据える長期的視点や、現地の最新状況に応じて最適なプログラムやアプローチを取り入れる柔軟な思考、タイムリーな対応など、ACDから私たちが学ぶ点が多々あると感じています。

日本では当たり前なことでも、ラオスでは実現が難しいことがあります。たとえば、政府の目が届かない山間部で少数民族が集団で何かをやることは警戒されがちで、子ども向けのト

報告:金子 恵美

レーニングでさえ政府や関係省庁の許可がおりないということが実際にありました。環境プロジェクトについては、ACDがラオスの法に基づいて重要性を説明し、許可がおりました。日本の私たちが出来ると思いついて入っていることは、実はACDによる政府との交渉があつてこそ実現しています。

政府との交渉のほかにも、予想外のトラブルが発生し、感情的になってしまいそうな場面も少なからずあります。しかし、ノンさん・ニヤイさんは動じません。「私たちは何のために活動しているか。それが大事」とニヤイさんは言います。目的 - 人々の自立や生活の質の向上 - をまっすぐに見つめており、その過程にどんな問題があろうと、理不尽な対応をされようと、視線がぶれないのです。

AEFAにとって、ACD、ノンさん、ニヤイさんは現地での活動になくはならない存在であると同時に、日本の私たちに新たな学びをもたらしてくれたり、私たちがつい期待を押し付けたり成果を急いだり、あるいは感情的になつたりしそうなときに「何のためにやっているのか」へと立ち返らせてくれたりする、大切なパートナーです。

少数民族の未来や国の将来を変えていくとすればそれは子どもたちであり、そのために教育を変えていかなければならない、という信念のもと忍耐強く活動を続けるACD。わたしたちAEFAは、その息の長い活動を支えていきたいと考えています。

*****ACDについて*****

認定:ラオス政府(教育スポーツ省、内務省、外務省の管轄)

代表:Dr. Boualaphet Chounthavong(ノンさん)

スタッフ:21名(2020年12月時点)

本部:ラオス/サラワン県

活動地域:サラワン県、チャンパサック県(政府認定団体なのでラオス全土での活動も可能)

ビジョンとミッション:民族参加型で民族の自立を可能にすること/自立型で持続可能なアプローチにより、より良い生活が得られるようにすること

活動内容:自分で考え自分で決めて問題解決する力を育てること、教育・農業・健康についての知識やスキルで生活の質をあげるようサポートすること、持続可能な社会の実現や資源管理を現地の人々に啓蒙すること。



学校建設プロジェクト

2020年12月現在



① アンラック分校



② ゴイカイ分校



③ マイベンマセル中高校



④ アットダットカッタ・ラフラ小中学校



⑤ ミーゴダ仏教小学校



⑥ コンミン分校



⑦ パヌアン小学校



⑧ カダップ小学校



⑨ ガン中学校



⑩ ガハイ分校



⑪ プーバチアン中高校



⑫ スリランカ 修繕プロジェクト対象校

国名	学校名 支援者（敬称略）	ひとこと
ベトナム	スアンバン小学校/アンラック分校 一般社団法人 ゼブラ社会貢献支援協会	アンラック分校では、2020年9月の新年度から新校舎で学び始めました。スアンバン小本校の「レインボーライブラリー」も完成。スアンバン校区の子供たちに、読書の楽しさを知ってもらうための1年間の活動を開始しています。写真①
	モニュー分校 水野恵子（付属設備：西澤順子）	2020年9月の新年度から新校舎で学び始めました。
	ゴイカイ分校 株式会社カナオカ	山間部の小学校で、工事に時間を要しましたが、2020年10月に竣工しました。写真②
	カンバオ分校 エルセラーン1%クラブ	1987年築の古くて危険な校舎、また、教室数も不足しており遠い本校に通学している生徒もいました。新しい教室を長く待ち望んでいた先生と生徒たちの願いがかないました。
	ティエンボ小学校レインボーライブラリー 増田雅暢	完成した図書館を拠点に、2021年2月～2022年1月の1年間、読書習慣啓蒙活動を行います。ブーキー（BOOKY）という好奇心旺盛で活動的な図書館のキャラクターと一緒に、子どもたちは、読書の楽しさを知ると同時に広い世界へ視野を広げます。
	ホーコンナイ中学校 増設 山田浩司 （寮：粟飯原匡伸）	増設新校舎は2020年11月、竣工。寮も間もなく完成です。10月から「環境プロジェクト」も始まり、環境整備とともに生徒の生きる力を伸ばします。
	マイバンマセル中高校 増設 高村江津子、佐野容子、匿名希望、望月幸子、空（うえ）をむいて歩こうプロジェクト アットダットカッパ・ラブラ小中学校 七村 守	教室不足の為、古い木材を活用した仮設校舎や青空教室で勉強していた生徒たちに、待望の増設新校舎が完成しました。水・電気、浄水設備も整備され、コロナ時には地域の臨時検疫所兼待機施設としても活用。同校をモデル校として、郡としてもサポートしていくことになりました。写真③
スリランカ	ドゥヌマダラワ小中学校 木村 達也、廣部 武	内戦による影響を色濃く受けた北中部州アヌラダプラにある学校。新型コロナによる活動制限で工事が遅れましたが、2020年の大晦日に新校舎が完成しました。1月中に学校への引き渡しが予定されています。写真④
	ミーゴダ仏教小学校 エルセラーン1%クラブ	北中部州アヌラダプラにある学校。敷地の地盤がゆるく基礎工事に苦労しましたが、立派な新校舎が完成しました。
	ジャヤティラカ小中学校 エルセラーン1%クラブ	コロomboの近く、ホマガマ地区にある学校。2020年の大晦日に建設作業が完了しました。スリランカでは新型コロナによる休校措置が続いていますが、1月から段階的に再開の見込み。新校舎の学校への引き渡しも1月中に予定されています。写真⑤
ベトナム	ハンバン分校 エルセラーン1%クラブ	子どもたちにできるだけ早く新校舎を届けるべく、工事を行っています。
	タンタイン1小中学校 株式会社サイサン	創業75周年事業で、ベトナムの子どもたちに学校をプレゼント。校舎の基礎工事を行っています。同校には「レインボーライブラリー」も支援、子どもたちに、読書の楽しさを知る活動を1年間行います。
	パウ分校 株式会社カナオカ	タンタイン1小中学校の分校の1つですが、児童数は200名近く。午前と午後の半日制での授業を余儀なくされています。新たに5教室を建設します。
	コンミン分校 株式会社近江兄弟社	創業100周年記念事業として、ベトナムの子供たちに学校をプレゼント。工事は順調に進歩しています。写真⑥
	クオン分校 エルセラーン1%クラブ	雨風が強いだけでなく危険な校舎、また、教室数が足りないため午前と午後の複式授業が必要で学習時間を十分に取れず新校舎の完成が待たれています。
	レインボーライブラリー 6校（ミンフー小・フォンリユー小・タムダ小・ツークアン小、ミンクアン小、ジントイ小） エルセラーン1%クラブ	本校に、図書館を設置。読書習慣啓蒙活動を行います。本校だけでなく分校とも連携し、地域の子供たち全体に本との出会いや新たな世界を開くきっかけが生まれます。
	クアセット中学校 新設 WANG基金 藤原和博 （水設備：株式会社プロードウェイ） バヌアン小学校 西村知康、寛子	地域の5つの村の子供たちが通う中学校。台風の影響で工事が少し遅れたものの、その後順調に進歩しています。地域の中心校として、今年度「環境プロジェクト」も取り入れられ、環境整備とともに生徒の生きる力を伸ばします。
	カダップ小学校 恒住泰則・恒住孝子	ファイラ学区にあるバヌアン小学校。村人は小学校新校舎の為に木材を集める等準備を進めていました。念願のプロジェクトが決定、乾季に道路状況が整い次第、資材が運び込まれ着工します。写真⑦
	チェンサイ小学校 増設 エルセラーン1%クラブ	順調に工事が進み、2021年春までに完成予定です。建設を進めるにあたっては、村人とNGOスタッフが話し合いながら進めています。写真⑧
	ガン中学校 株式会社フォーサイト	老朽化した木造の仮設校舎はシロアリ被害で危険な状態で、長い間新校舎建設を待っていました。幼稚園～小学生が安全な校舎で学べることになり、先生方も村人もとても喜んでいました。
スリランカ	ブワクビティヤ南小中学校 カルアッガラ・スリシッタルタ小中学校 エルセラーン1%クラブ	同社による支援校「ナポーン中高校」学区のガン分校では、近隣4か村の生徒が学びます。中学校修了後は、ナポーン高校で学べるようになります。写真⑨
	【修繕プロジェクト対象】コロombo周辺のホマガマ地区にある学校。古くなった校舎の傷みが激しく、屋根に大きな穴があいているなどして教室として使えるスペースが限られています。建て替えではなく徹底修繕プロジェクトとして2020年12月に着工しました。	
ベトナム	タイアン分校	1989年築の古い校舎は隙間や壊れた箇所が多く、雨風が強いばかりか危険です。新校舎の建設が待たれています。
	ガハイ分校	モン族の村。道路状況が悪く、バイクや徒歩によるアクセスとなる。仮設校舎は老朽化しており、雨風や暑さ・寒さをしのぐことができないばかりか、危険です。写真⑩
	クーム分校	1980年築の倉庫を改造した2教室は、老朽化が激しく危険なばかりか湿度が多く健康によくありません。教室数も足りないため、3～5年生は本校に通学しています。
ラオス	ニュー中学校	もともと小学校だった建物を、中学校として活用しています。2棟ある校舎のうち1棟は壁も床も無く、雨漏りのする古い仮設校舎です。強風や大雨の後には、村人たちが修理をしながら使っています。
	ファイルーシ幼稚園 ブーバチアン中高校 Phase2	小学校と同じ敷地内にある幼稚園は仮設で狭く、満員状態です。保護者の「子どもを通わせたい」という要望は高く、新しい園舎を整備することでより多くの幼児が通えるようになります。
スリランカ	バンヤーグラ小学校 ワガワッタ・タミール小中学校 イルコーウィタ小中学校	ブーバチアン中高校は、「バチアン山」の麓にあり、その名を冠したバチアン郡の基幹校です。老朽化した校舎を建て直し、子供たちが安全に学べる環境をつくります。写真⑪
	【修繕プロジェクト対象】コロombo周辺のホマガマ地区にある学校。スリランカの公立学校には修繕の予算がなく、低所得家庭の多い地域では保護者からの出資による補修ができないまま備わった建物を使い続けている例が多くあります。取り壊さなくてもまだ使える校舎を大切に徹底修繕プロジェクトとして計画中です。写真⑫	

「コロナ時代」の支援とコミュニケーション

AEFA からの情報発信、そしてこれから

■現地に行けないもどかしさ

「新型コロナ」に翻弄された2020年。1年近くの間、現地に足を運ばなかったのは、AEFA始まって以来のことでした。

幸い、AEFAにはこれまで培ってきた現地NGOとの信頼関係があります。現地駐在員をおかず、NGOにプロジェクト進行を任せてきた「AEFA方式」が功を奏しました。NGO事務所と、東京のAEFA事務所、そしてテレワーク中のスタッフの自宅をつないで、オンライン会議やメールでの打ち合わせを重ね、進行中の案件は大きな影響を受けることなく進めることができました。

■難しくなった「生のコミュニケーション」

国内での活動も様変わりしました。AEFAの活動の柱のひとつである出前授業は、申し込みがほぼ途絶えました。感染防止のために部外者立ち入り禁止とした学校が多く、また授業時間の確保のため、出前授業を実施する余裕がなかったようです。自粛の緩んだ夏以降は徐々に感染防止対策をとりながら再開していますが、例年に比べると大幅に減少しています。

そして、AEFAを支えてくださる会員や支援者の皆様とのコミュニケーションも、従来通りというわけにはいなくなりました。

商社マンだったAEFA理事長の谷川は、「現場主義」をモットーにしています。寄付や支援のお願いやプロジェクトの進行報告などの機会には足を運び、直接お話してその場の空気を共有し、つながりを大切にしてきました。もちろん電話やオンラインミーティングなどの代替手段は積極的に活用しましたが、歯がゆさは禁じえませんでした。

理事会もオンラインで実施しました。誰もが大変なこの時期に、あえてAEFAの活動を前に進めていくことの意義を見直し、それをどのように進めていくのかについて、理事の間でさまざま

な議論が交わされました。

■これまでになく情報発信を

事態の長期化が見込まれるようになり、いつまでも手をこまねているわけにいかないと考えました。そして、積極的な情報発信のためにホームページを充実、さらにFacebookも活用をはじめました。

例年2回発行しているフレンズ会報でも臨時号を発行し、近年力を入れている奨学金やレインボーライブラリー、科学技術教育、難民学校支援などのソフト支援について詳しくお伝えしました。完成が目に見えやすい学校建設に比べ、教育プログラムやライブラリーなどのソフト支援はその成果がイメージしにくいのではないかと、プログラムに参加した子どもたちの目覚ましい成長などを充分説明できていないのではないかと……。それを会員や支援者の皆様にごどのようにお伝えしていくのか。広報チームは、オンラインでの話し合いを重ねました。

2019年のはじめから、広報チームには応援団2人が参加しています。専門知識を活かし、自分ができること・できる範囲で、少しでもAEFAにかかわりたいというプロボノです。立場が違くと見えるものも違います。現場の担当者にとっては「あたりまえ」のことがプロボノの目には「それはきちんと報告しなきゃ」という宝物だったり、逆にプロボノが基本的な事柄に気づかないこともありました。5人が思いをぶつけ合って、新しい形の広報を模索しているところです。

■会員の皆様の声とともに

この臨時号に同封する形で、会員様に向けたアンケートを実施しました。寄せられた声は様々でした。「地域の違いや格差に



Web 理事会 8月



AEFA 事務局からの動画メッセージを見るマレーシア CSO 校の生徒たち

●AEFA ホームページ

長い間親しんでいただいている旧ホームページの雰囲気そのままに、「さらに見やすく・わかりやすく」を目指してリニューアルしました。

もっとも大きく変わったのはトップ画面で、最新のお知らせがブログのように表示されます。各コンテンツへのアクセスも、カテゴリタグをつけたので容易になりました。データ関係など、今後引き続き充実させていきます。

<https://www.nippon-aeфа.org/>



●Facebook

アカウント名を「AEFA アジア教育友好協会」に改めて再スタートしました。フレンズ会報をトピックごとに紹介するほか、プロジェクトの進捗状況や季節の話題、現地から届いたばかりの子どもたちの笑顔の写真や動画などを掲載しています。SNS ならではのフットワークの軽さを活かして、こまめな情報発信をしていきたいと思ひます。

新 Facebook アカウント：AEFA アジア教育友好協会

<https://www.facebook.com/>

AEFA.AsianEducationAndFriendshipAssociation/



も考慮して対応していることは素晴らしい「これまでの積み重ねがあって、今がある」「プロジェクトが、教育から、生き方・生活の改善へと向かっていることがわかった」などの感想のほかに、「今後役に立つ支援とは何かを知りたい」「自分に出来ることで活動に寄与したい。そういうスキルや思いを持っている人はきっと多いはず」という心強い言葉もいただきました。直接事務所に立ち寄ってお話くださった方もありました。

オンラインではありますが、会員や支援者の方と、新校舎の写真や子どもたちのメッセージ動画などを見せながらお話しする機会も増えつつあります。2021年夏頃には、広く「オンライン会員のつどい」を実施したいと考えています。

■「コロナ後」だからできることを

手探りで進んできたこの1年、それなりの手ごたえを感じています。出席者のスケジュール調整が大変だった会議が、オンライン化によって遠隔地間でも実施可能となったことでかえって頻繁に開催できるなどの利点も見えてきました。何よりも、異常事態のなかにあっても現地のプロジェクトを着実に進められたことは、私たちの大きな自信にもつながりました。

そして、この状況下で変わらずAEFAを応援してくださる会員や

支援者の皆様の存在には、とても勇気づけられています。

従来通りの往来や交流が再開できたあかつきには、まずは、のびのびになっている開校式が待っています。すでに現地では子どもたちは新しい校舎での勉強をはじめていますが、きちんと開校式ができていない学校がたくさんあるのです。支援して下さった方々にも校舎をぜひご覧いただきたい、そして喜びを分かち合いたいと思っています。

もちろん、単純に「コロナ前」に戻そうというわけではありません。例えば、訪問できない支援者には、新校舎の写真アルバムや子どもたちからのメッセージ動画等で報告する、現地の人々とオンラインで結んで会話するなどの、新たなスタイルをつくりたいと考えています。コロナ禍を経験した今だからこそ、さらにパワーアップした活動ができるのではないかと考えています。

新規着工も、調査案件もたくさん待っています。ソフト支援でも、多彩なプロジェクトが続々と始動しています。コロナ禍をきっかけにご縁ができたところもあり、これから一緒にどんなことができるかが楽しみです。

このワクワクを、会員や支援者の皆様にもぜひ共有していただきたい。そのための情報発信を、さらに進めていきたいと考えています。

メディアに登場

NHK ワールドで AEFA と CSD の活動を集

2020年9月2日、NHKワールドTVの海外向け番組「Side by Side」においてAEFAと、ベトナムの現地パートナーNGOのCSD(Reserach & Communication Centre for Sustainable Development)の活動が紹介されました。この番組では、日本と海外、特に開発途上にある国で互いにインスピレーションを受け合いながら協働し、より良いコミュニティづくりを目指す人々を紹介しています。

AEFAとCSDが特集された放送回のタイトルは、「Conquering COVID-19: Rebuilding Schools in Vietnam (新型コロナウイルスを乗り越える:ベトナムでの学校再建事業)」。ベトナム北部の山間部など、公的な教育支援が行き届かない地域で老朽化した校舎を再建したり、図書館の設置や読書活動の普及を行ったりするための資金集めに奔走する東京のAEFA理事長・谷川。ハノイにある

CSD事務所から片道数時間かけて僻村の学校を訪問し、村の子どもたちと交流するCSD代表・アインさん。日本とベトナム双方に密着取材し、コロナウィルスの影響で海外出張ができない現在、オンラインで現状報告や意見交換を行い、これまで以上にパートナーシップを深めていく様子が丁寧に映し出されました。学校現場やレインボーライブラリーの活動なども見ることができます。

NHKワールドは海外向けの英語放送ですが、番組ホームページでは、2021年8月まで無料で視聴できます。日本で収録したシーンは日本語音声に英語字幕付きです。

Side by Side NHKワールドTV

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/sidebyside/>



AEFA 事務所にて取材中



CSD と AEFA 事務所をつないで ZOOM 会議

インタビュー記事掲載のお知らせ

2020年後半、さまざまな読者層向けの雑誌でAEFA理事長へのインタビュー記事が掲載されましたのでご紹介します。



『**ウェッジ WEDGE**』8月号 株式会社ウェッジ
VALUE MAKER 付加価値を生む仕掛人 コーナー
「学校教育に捧げる『第二の人生』アジアに300校を建設」

『**THE21**』10月号 PHP研究所
50歳から必ずやっておくべき10のこと 特集
第2の人生のスタート。今、始めたいことと捨てること
「社会貢献」のケースとして
「会社を辞めたら、名刺はすべて捨てなさい」

『**清流**』12月号 清流出版株式会社
自分らしく輝いて…スマートエイジング コーナー
「『世のため人のため』に奔走する充実人生」

タオイのすてき

AEFA発 少数民族の暮らし紹介

タオイ族◆南ラオスの山岳地帯（サラワン県タオイ郡）に多く居住する。モン・クメール語族。



親から子へ、代々受け継がれる手織布の技。織手の頭の中に描かれた色彩とデザインは1枚1枚がオリジナル。塩ビ管や木を用いて手作りされた素朴な腰帯で、約2週間ほどで織りあげられます。大木の木陰で女性たちが思い思いに腰を下ろし、おしゃべりに興じながら織る姿はさながら「井戸端会議」。女性たちの情報交換や社交の場でもあるそうです。（女性に限らず男性も織手となります）

力強い色使いと、ラオスの他の民族の布のように龍やゲンゴロウや花などの文様ではなく、緻密なパターンをアクセントにするデザインが特徴です。ビーズを織り込む技法を有する村もあります。

布は売ったり物々交換されるほか、家族の衣類(上着・シン(tube skirt)や赤ちゃんの抱っこ紐など多様に活用されます。（綿を栽培している村もあれば、市場で糸を買う村もある）

中国やタイからの化繊の布が安価に出回るようになり、昔ながらの手織物は減少しつつあります。AEFAでもできるだけ布を購入して、手仕事を誇りに思い、伝統として残ってほしいと願っています。

リクルート Why AEFA?

木村 達也 →→→

藤原 和博

教育改革実践家
「朝礼だけの学校」校長

リクルートのトップセールス、新規事業部長を経て初代フェローというスーパービジネスマンの世界から転じ、杉並区立和田中学校や奈良市立一条高校の民間校長として様々な改革を断行した経験をもとにライブデザインの方法を教える超人気講師。講演ライブ 1500 回、著書累積 150 万部。

<https://www.yononaka.net>



ララ小学校で子どもたちとコマまわし中

AEFAは16年間でアジアに320校の学校建設を行ったが、私自身は「WANGアジア希望の学校基金」を作り、ラオスに絞って12校のファウンダー(創立者)探しのお手伝いをした。4度現地での開校式にも参加させてもらった。この物語は12月7日の週にポプラ社から出版される87冊目の著書『革命はいつも、たった1人から始まる』に詳しいので、お手にとっていただければ嬉しい。

昨今では建設費も高騰している折から、今までのようにバンバン公立校を建てていくのは難しくなってくる。むしろ一校一校との関係性を深掘りしていく方針転換が望まれているように思う。

そんな時、谷川洋理事長から良い話を聞いた。「そろそろコミュニティのモデルとなっている学校に図書館を作って本を寄贈し、子どもたちに本を読んでもらおうと考えている」というのである。

ラオスでは、山岳部の少数民族のために学校を建てたのだが、高床式茅葺の質素な住居にも横に古いパラボラアンテナが設置されていて、皆テレビは観ている。でも、隣のタイの放送局の方が楽しい番組を供給しているので、子どもたちもそれに親しみ、なかなかラオス共通語が覚えられないらしい。

日本の明治政府も国づくりのために150年前にやったのは、まず「日本語」という共通語を喋る国民の醸成だった。共通語がなければ意思疎通も合意もできず、「日本国」の国民が安心して暮らすことは難しいからだ。

だから、コミュニティの核となる学校に、その国の言語に親しむための図書室があるのはいい。私のAEFAとの次のフェーズのお手伝いも、モデル校に一校ずつ図書室を作って本を収める活動に絞ろうと思う。

本当は、世界中の良質な児童書をラオス共通語に翻訳して絵本にまとめる出版社が現地に現れれば、それも応援したいのだけれど。

次のバトン: 橘川 幸夫さん(デジタルメディア研究所 代表)

AEFA往来 2020.2~2020.12

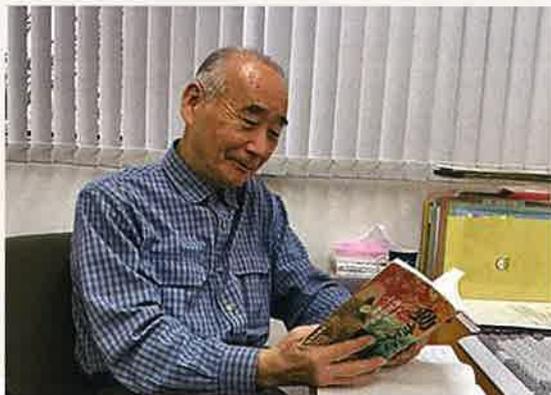


- | | |
|--|--|
| <p>6月5日 支援者・WANG 藤原様と打合せ
●学校建設プロジェクトの付加価値を更に高めるよう激励される</p> <p>8日 恒住孝子様から電話 理事長著作『奔走老人』を読み学校建設支援をしたいとの申し出
●その後(7月9日)にラオスのカダップ小学校建設決定・感謝!</p> <p>9日 (株)サイサン様が来社 ベトナムのタンタイン1 小学校提案
●6月29日サイサン訪問=川本社長と面談=建設支援決定!</p> <p>15日 AEFA創立16周年記念日
●コロナに負けず頑張ろうと仲間一同で誓い合う</p> <p>19日 高村江津子様打合せ・ラオスのマインマセル中高校支援決定</p> <p>7月7日 AEFA 下期の活動方針打合せ会・ソフト支援の充実を話合う</p> <p>13日 (株)カナオカ・金岡社長と打合せ
●その後、ベトナムのパウ分校建設決定!</p> <p>14日 オルタスジャパン (テレビ番組制作会社) と打合せ
20日 AEFA 取材、22日ベトナムの現地 NGO と Zoom 会談
●その後ベトナム現地取材を経て、NHKワールドで9月2日放映</p> <p>7月31日 理事長=旭川出張・熱中小学校グループ集会で講演
●講演後の議論の中で、ベトナムで1校建設決定・ヤッター!
その後 (9月11日・12月16日) メンバーが来社・建設候補打合せ</p> <p>8月1日 佐野容子様打合せ・ラオスのマインマセル中高校支援決定</p> <p>8月4日 AEFA 活動打合せ会・2020 年度建設案件の再整理</p> | <p>8月14日 「空をむいて歩こうプロジェクト」・マイバンマセル中高校支援決定</p> <p>25日 NPO プラチナ・ギルドの会・奥山理事長来訪、活動取材</p> <p>25日 スリランカのパートナー・ダヤシリ氏と Zoom 打合せ
●建設中4校の進行状況報告+追加5校の候補校打合せ</p> <p>9月23日 ニックトラスト社を訪問・ベトナムでの学校建設打合せ</p> <p>29日 AEFA 定例打合せ会</p> <p>10月1~2日 大阪出張、エルセラーン社を訪問・2021 年度の支援方針打合せ
●17~18日キャプテン集会参加・AEFA活動の報告</p> <p>6日 支援者七村守様を訪問・スリランカの小学校建築現状報告</p> <p>7日 WANG 藤原様打合せ・ラオスの図書館建設支援が決定</p> <p>13日 早稲田大学=ICC/ 異文化交流センター集会で講演</p> <p>23~24日 理事長=帯広出張・十勝さらべつ熱中小学校グループ集会で講演</p> <p>11月9日 (株)フォーサイト・山田社長と面談・ラオスのガン中学校建設決定</p> <p>11月17日 日本財団 森常務と打合せ・2021 年からの支援方針について</p> <p>12月3日 AEFA 理事会・2020 年活動報告 16 校建設及び決算見込み報告</p> |
|--|--|

2020 年は大変な年であったが、AEFA は現場主義~各国パートナーとの連携で、現地プロジェクトは大きな影響を受けず進めることが出来ている。一方、私は毎年平均 6 回、延べ約 60 日、1 年の五分之一はアジアで過ごしていたが、当然のことながら激減。現場で元気を頂いていたから辛い気持ちも大きいが、焦っても仕方がない。

じっくりと本を読む時間が増えた。

「動きたした時計~ベトナム残留日本兵とその家族」(小松みゆき著・めこん刊) は、AEFA の会報作りを手伝ってくださっている只木良枝さ



んによる編集。AEFA のプロジェクト対象地、ベトナム北東部トゥエンクアン省やソクザン省が登場する。毎年訪問していた地域にそのような歴史のあったことを知り、現地の風景やひとりひとりの顔を思い浮かべながら思いを馳せる。

私たちは歴史のつながりの中で生きている。

ベトナムに進駐した亡父から受け継いだ願いを叶えたい……と、ベトナムに小学校を何校も建てた支援者のことを思い出した。開校式では、子どもたちを喜ばせたいと練習を重ねた手品を披露、「もっともっ」と何度もせがまれていた。

北タイの小学校では、日本人の DNA をもつ子供たちがいると聞いたこともある。

人生で一度出会ったものは、たとえ意識していなくても何かが残るものなのだろう。それぞれの思いや願いが、時を超えて平和な未来の礎となることを信じている。

歩け、走れ、登れ…天命に従え、よし!

Tanikawa's Notebook 理事長・谷川洋



新 監事

井田 明夫 Akio IDA

1941年生まれ。丸紅株式会社海外部門などで勤務。客観的・中立的な監査とガバナンス強化のために、2020年7月着任。

まだまだ慣れないことばかりですが、AEFA の活動でアジアの子どもにより一層学びの機会を届けられるよう、監事としての職務に尽力してまいります。



※本誌掲載の写真は、新型コロナウイルス感染拡大前のものが含まれています。また現在、現地での活動は感染リスクに配慮して実施しております。

私たちは各国のパートナーNGOと手を携えて活動しています。

ベトナム：Vietnam Assistance for the Handicapped (VNAH)
Saigon Children's Charity (SCC)
Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)

ラオス：Association for Community Development (ACD)

タイ：Raks Thai Foundation (CARE Thailand)

スリランカ：Rotary Club of Colombo (RCC)

